



Profile

和田 竜さん

昭和44年12月大阪府生まれ。さいたま市在住。平成15年12月、オリジナル脚本「忍ぶの城」で第29回城戸賞を受賞。平成19年12月には小説「のぼうの城」を出版。同作は、第139回直木賞候補作となり、第6回本屋大賞2位に選ばれる。平成22年9月に任命された埼玉の魅力を発信する埼玉応援団「コバトン倶楽部」のメンバーとしても活躍中。

「のぼうの城」の作成秘話

市長 和田さんは子どものころから小説家になりたいという夢をお持ちだったのですか。
和田 小説家になることは思っていなかったですね(笑)。もともと映画監督になりたくて、脚本を書き始めました。忍城の水攻めを題材にした脚本で、城戸賞を受賞したのですが、映画化しなくてもなかなか実現できなかったもので、まず原案として出そうということから小説にしました。



和田竜さん

市長 小説を書くことは意図していなかったのですね。ところで、そもそも、どうして忍城や成田長親を題材として脚本を書くことになったのですか。

和田 僕は以前、繊維業界新聞社にいます。そこに「行田市出身の同僚がいたんですね。僕が脚本を書いていることや歴史が好きだということや、彼に伝えたら、教えてくれたのが、忍城の水攻めの話だったんですよ。彼に教わらなかったら、この史実を知らなかったかもしれない、書くこともなかったかもしれないから、彼には本当に感謝しています。
市長 この忍城水攻めは、わがまち行田で実際にあった史実ですが、小が大に勝る、フィクションドラマみたいなストーリーが最大の魅力ですよね。
和田 バラエティーに富んでいるんです

よね。水攻めという昔ではあまりない攻め方があったり、関ヶ原の戦いのビッグネームが攻めたのに負けてしまったり、その負かした人間が一人ひとり个性的であったりとか、ドラマを構成する要素を歴史が全部用意してくれているという印象で、僕としてはそれをさらに発展させるというような作業でした。だから、誰が書いても平均的なものではなく、史実だと感じました。
市長 「のぼうの城」のおかげで、実在した武将たちに非常に愛着を感じることができました。市民の皆さんも、あらためてこの地に脈々と受け継がれてきた歴史や遺構などを知ることができたと思います。



取材で感じた行田の魅力

市長 ところで、行田での取材の際、どんな場所へ行ったのですか。
和田 基本的には忍城の周辺と丸墓山との往復が多かったですね。郷土博物館に現在の地図と忍城の昔の地図を合わせたような地図があって、それがすごく役に立ちました。物語を書くときには距離感が割と大事なので、下忍口から丸丸ってこのくらいの距離があるんだとか、こんなふうに見えるんだとか、そういうのを確認しながら歩きましたね。あとは高源寺とかね。僕にとって、歴史上の人物って芸能人みたいな感じなので、正木丹波守のお墓を見たときには、やっぱり感動しましたね。
市長 新たな発見や興味を抱いたものなどはありましたか。
和田 僕は史料を読んで、すでに愛着を持って行田に来たので、ただその土地を見て回るというのとはちょっと違うんです。ここに成田家の武将がいたのかとか、本丸跡だったら、ここにいるのか、騒いだりなんかしていたんだらうとか、そういうイメージを膨らませながら見るので、ただ行田に来るだけで何か感動があるんですよ。例えば、丸墓山から忍城までの距離は、史料を読む限りではあまりないんじゃないのかなというイメージ